

第136図 灰原1出土須恵器(4)他

外反または直線的に立ち上がるが、473は体部下半が若干内湾して立ち上がる。475～478は高台皿で、475～477が上層、478が表土から出土している。いずれも残りが悪く、細部の特徴を観察することはできない。

479は小型の平瓶で、口縁から頸部の可能性が高い。480は小壺の上半部で、口縁端を僅かに欠損している。481は壺の胴部で、小型であることから水瓶形長頸壺の可能性が高い。482・483は長頸壺で、いずれも頸部付け根に突帯が巡っている。484・485は壺の底部で、平底を呈し、いずれも長頸壺と考えられる。

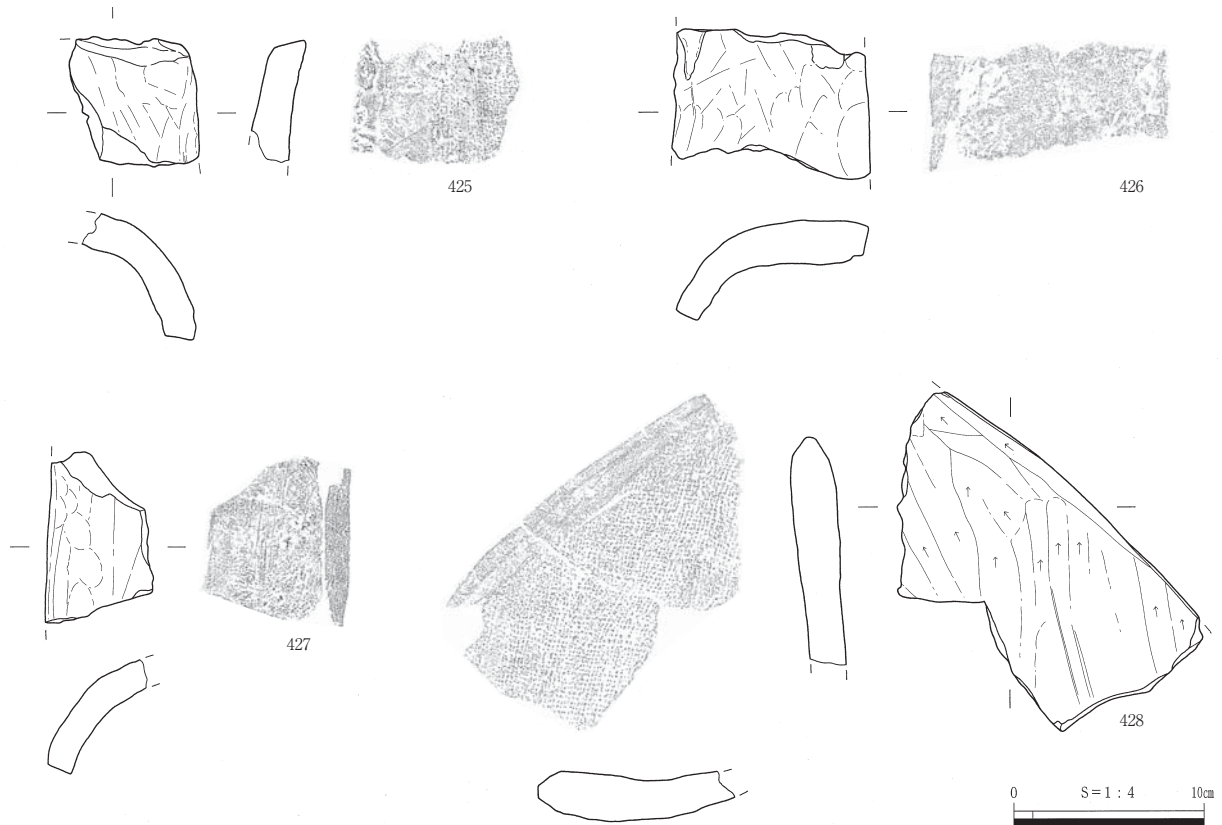
486～490は蓋で、486～489が下層、490が上層出土である。487・488にはつまみが付いていた痕跡がみられ、486・490より口径が大きくなりそうである。489は大型の蓋として分類したが、天地逆と



第137図 灰原1出土瓦(1)



第138図 灰原1出土瓦(2)



第139図 灰原1出土瓦(3)

すると鉢の可能性もある。ただし、この形態をなす鉄鉢形の鉢は本遺跡では出土していない。

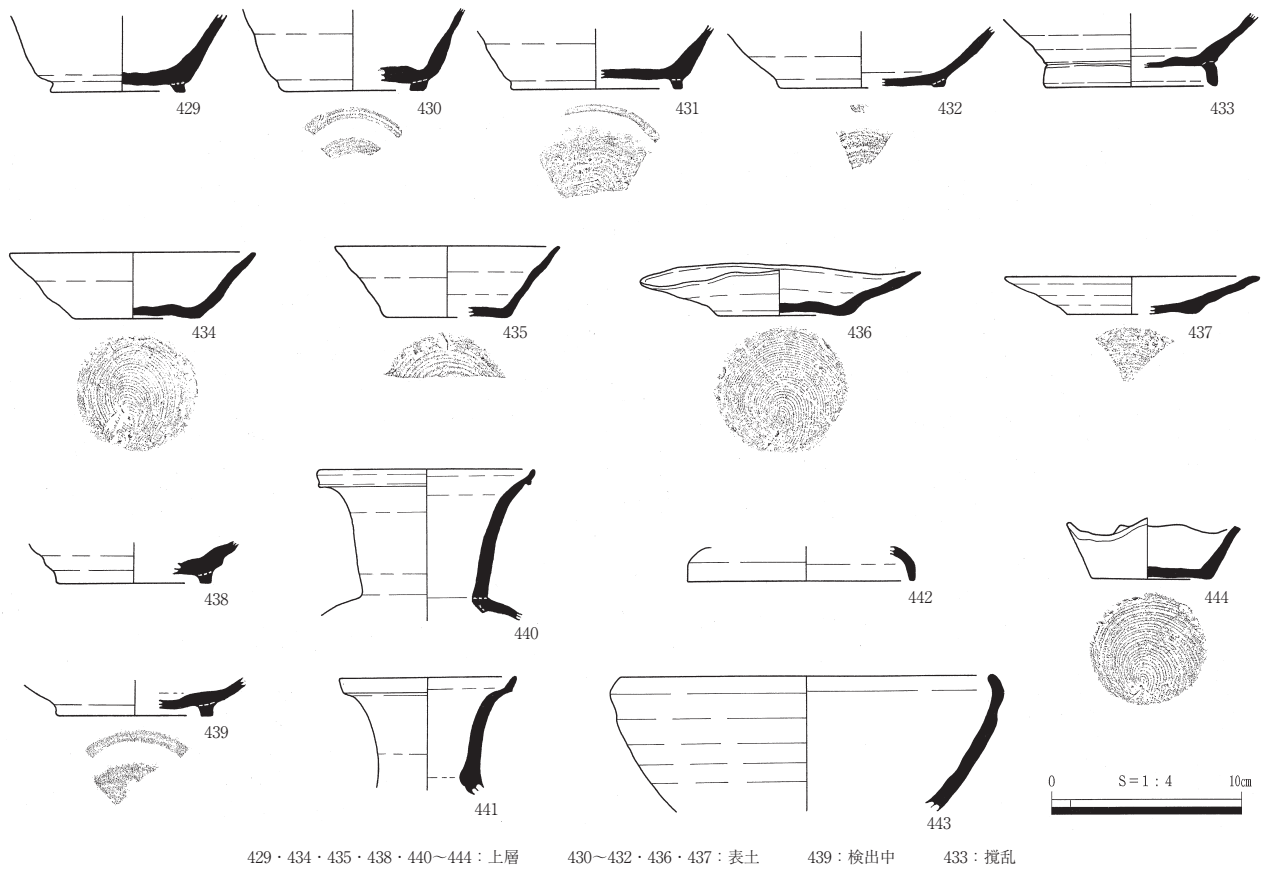
491・492は鉄鉢形の口縁部で、491が下層、492が上層から出土している。493～496は鉢で、493が下層から、494～496が上層から出土している。形態とサイズの個体差が大きい。

497～499は高台の付いた中型器種の底部で、その器形とサイズから壺に分類している。ただし、本遺跡で高台が付くことが確実な壺は存在しないため、鉢などの壺以外の中型器種の可能性もある。とくに498は鉢の底部としても違和感のない体部の開き具合である。すべて下層出土である。497・498は類似した胎土、焼成で、同じ調整が施されている。499は高台杯に近い形態で、調整も似るが、高台杯にしては大型で厚手であることから壺類とした。

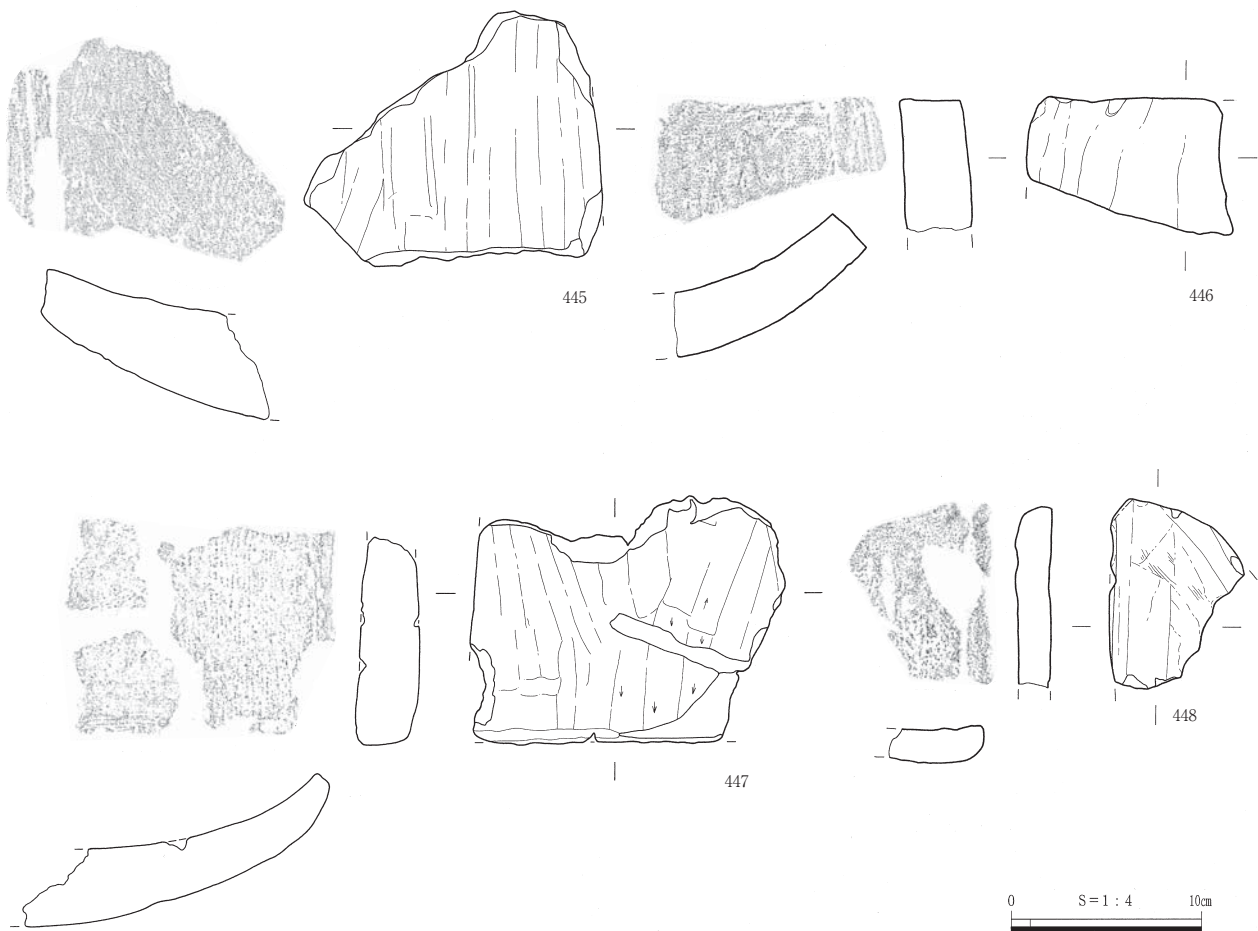
500は風字硯とみられ、下層から出土している。焼成は不良である。

501～503は甕片転用焼台で、501・502が下層、503が上層から出土している。501は積み跡が色調の違いとしてみられる資料で、積み跡の大きさからみて、杯の底部が載せられていた可能性が高い。502は同一個体の甕片が2つ熔着した焼台である。表面には瓦の端部が熔着した可能性が高い直線的な焼粘土の付着がみられ、裏面には石が熔着している。したがって、石の上に甕片を複数置いて焼台とし、その上に瓦を立てていたと推定できる。窯2新段階での焼成に伴う可能性を考えてもよいかもしれない。なお、甕の内面当て具痕はいわゆる車輪文である。本遺跡からは本資料以外に車輪文のある甕片は出土しておらず、かなり特異な個体である。503は表面に須恵質の焼粘土片が熔着しており、瓦の一部の可能性が高い。この粘土片の横には砂が熔着しているほか、裏面は円く黒色化した部分が見られる。

504～514は瓦である。504～508は下層出土で、504～507が平瓦、508が丸瓦である。508は広端面の



第140図 灰原2出土須恵器



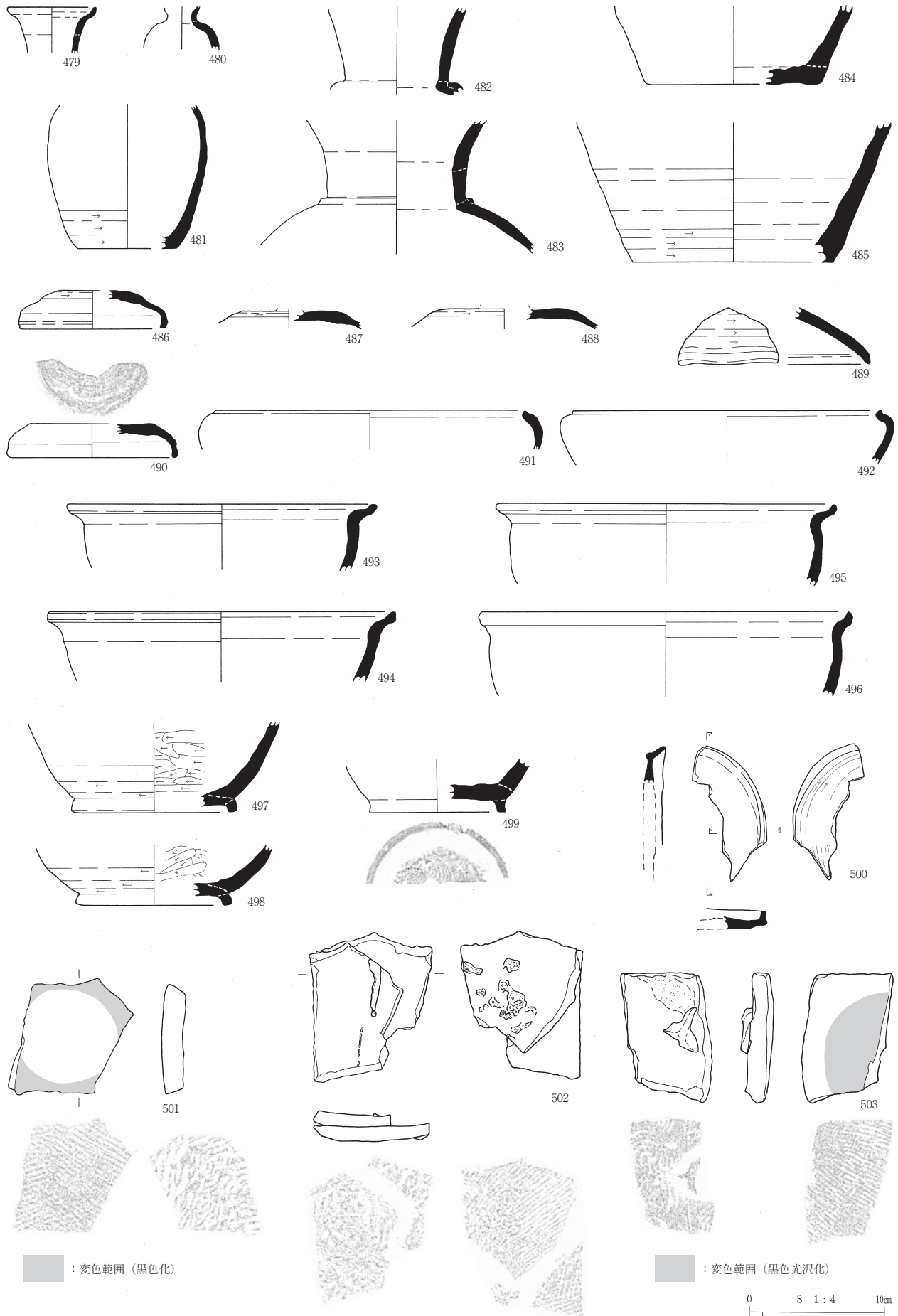
第141図 灰原2出土瓦



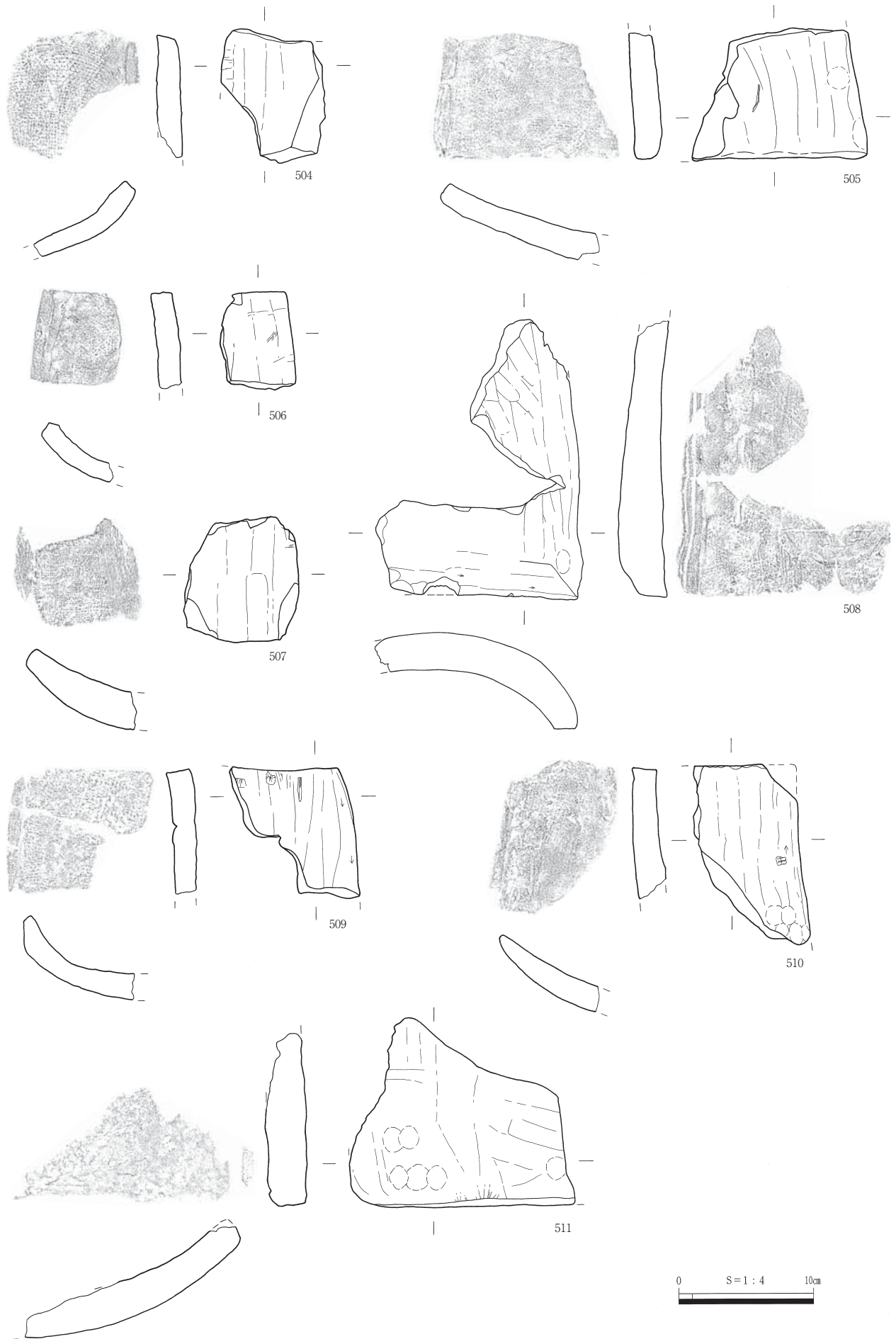
449・450・454・455・460～463・470・471・474：下層
 451・456～458・464～467・469・472・473・475～477：上層 452・453・459・478：表土 468：攪乱

0 S=1:4 10cm

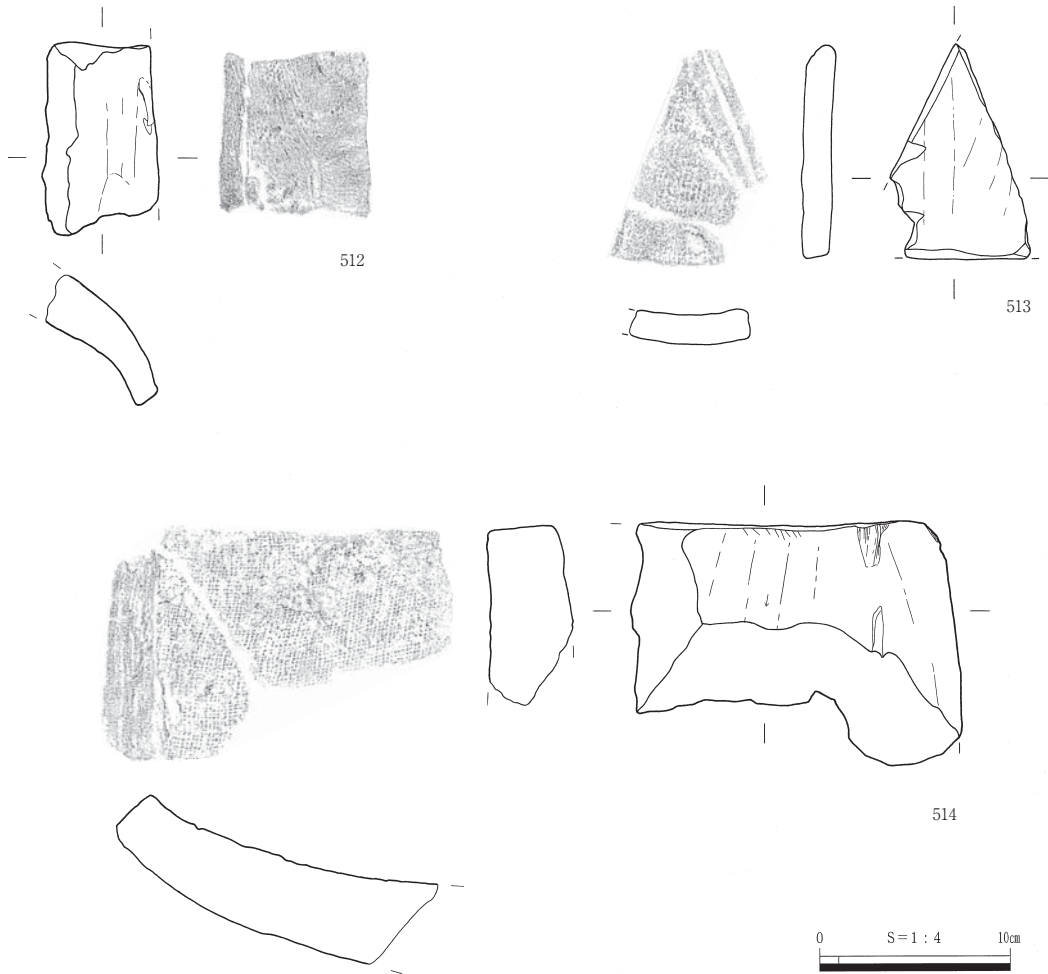
第142図 灰原3出土須恵器(1)



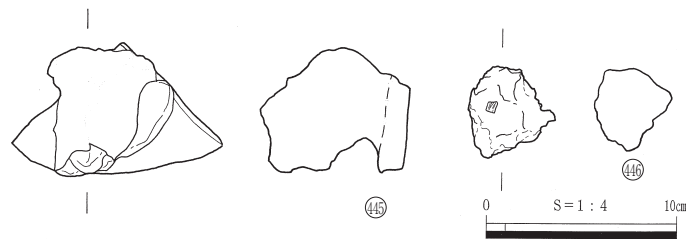
第143図 灰原3出土須恵器(2)



第144図 灰原3出土瓦(1)



第145図 灰原3出土瓦(2)



第146図 灰原3出土製鉄関連遺物

凸面側がやや幅広く面取りされている。509～513は上層出土で、509～511が平瓦、512が丸瓦、513は薄手の隅切瓦とみられる。514は灰原3周辺から出土した平瓦である。

その他、製鉄関連遺物が5点出土しており、④⑤・④⑥は炉内滓である。④⑤は須恵器甕片と銹によって二次的に固着している。

灰原出土横瓶・甕(第147・148図、表47、PL.99・100)

ここでは、灰原出土の中型・大型器種のうち、遺構間での接合関係をもつ資料を報告する。ただし、甕は灰原出土資料をまとめて掲載しており、遺構間接合資料ではないものも含んでいる。

515は横瓶である。灰原3出土破片を中心に、窯2新段階、灰原1、窯1埋め戻し土などから出土

した破片が接合している。全体の3分の1程度の形状に復元できたが、不均衡な接合状態のため、全体形はあまり良く分からない。現状では正面から見た場合に左右対称となっていないが、これが本来の形状なのか、焼き歪みなのか判断が付かなかった。外面に平行タタキ、内面に同心円当て具痕がある。なお、接合していない同一個体片のなかに円盤充填を行った痕跡が明瞭に観察できるものがある。

516～524は甕である。516～522は遺構間で接合関係をもっているが、523・524はそうではない。接合関係はすでに見たように、灰原3を中心にしたものが多い(表47)。これらの甕は、形態や調整、大きさなどが個体によってかなり異なっている。

516は本遺跡内で出土している資料のなかで、最大の甕である。それを反映してか、これと同一個体と思われる破片が本遺跡出土甕片のなかで最も多い。この甕を焼成した窯は、その大きさからみて窯3以外には考えにくい。なお、先述のように、この甕の胎土中には流動滓様の滓片が混入しており、製鉄関連遺構と窯3の時間的な関係を考える上で重要な資料である。

その他の灰原関連遺物(第149図、PL.99)

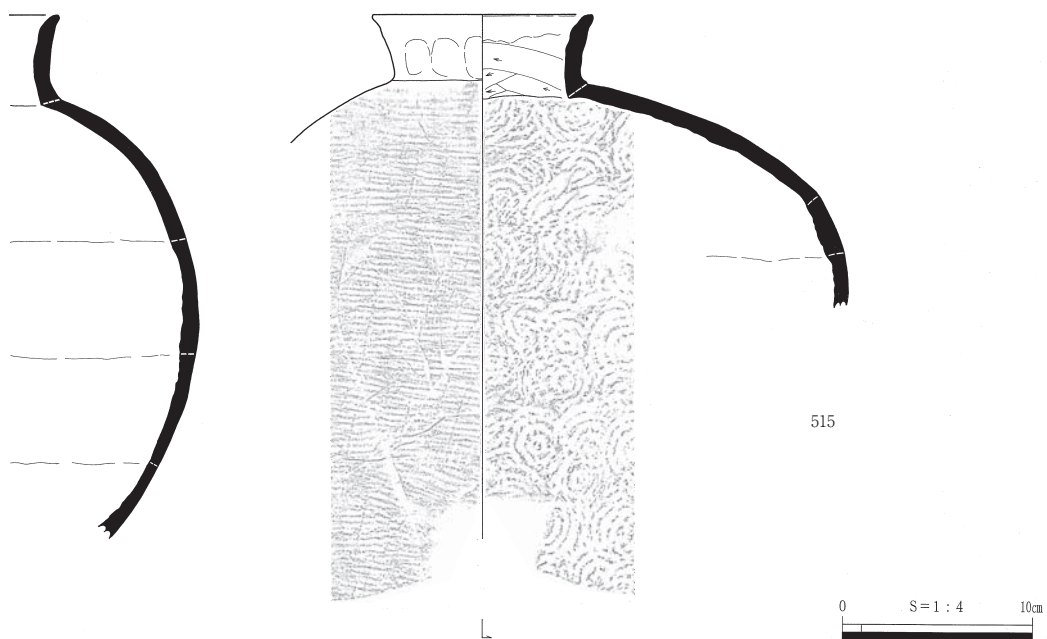
灰原の周辺には灰原上層がさらに二次堆積した層が存在し、そこから須恵器が多く出土している。また、表土掘削に伴って出土した資料など、どの灰原から出土したかを識別できなかった須恵器も存在する。ここではこうした遺物のうち、主に出土数の少ない器種や、特殊な形態の資料を選んで図化した。

525・526は灰原1周辺から出土した資料である。525は高台杯で、本遺跡の一般的なものより高台が高い。526は皿で、本遺跡の一般的なものより小型である。

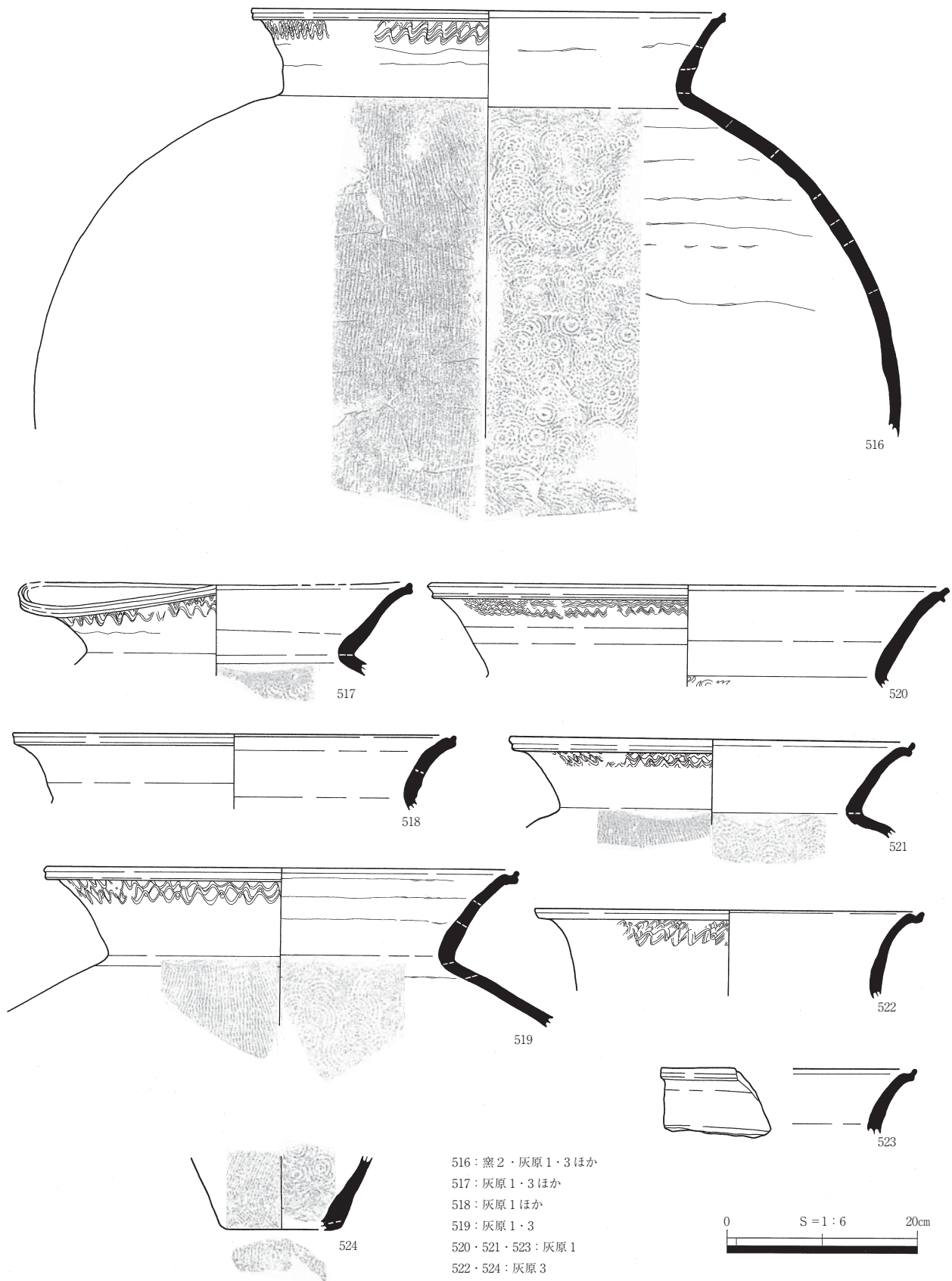
527～530は灰原2周辺から出土した資料である。527は突帯付高台杯、528・529は杯である。530は頸部付け根に突帯が巡る長頸壺である。531は灰原1・2周辺から出土した蓋である。

532・533は灰原3周辺出土である。532は皿、533は頸部付け根に突帯が巡る長頸壺である。

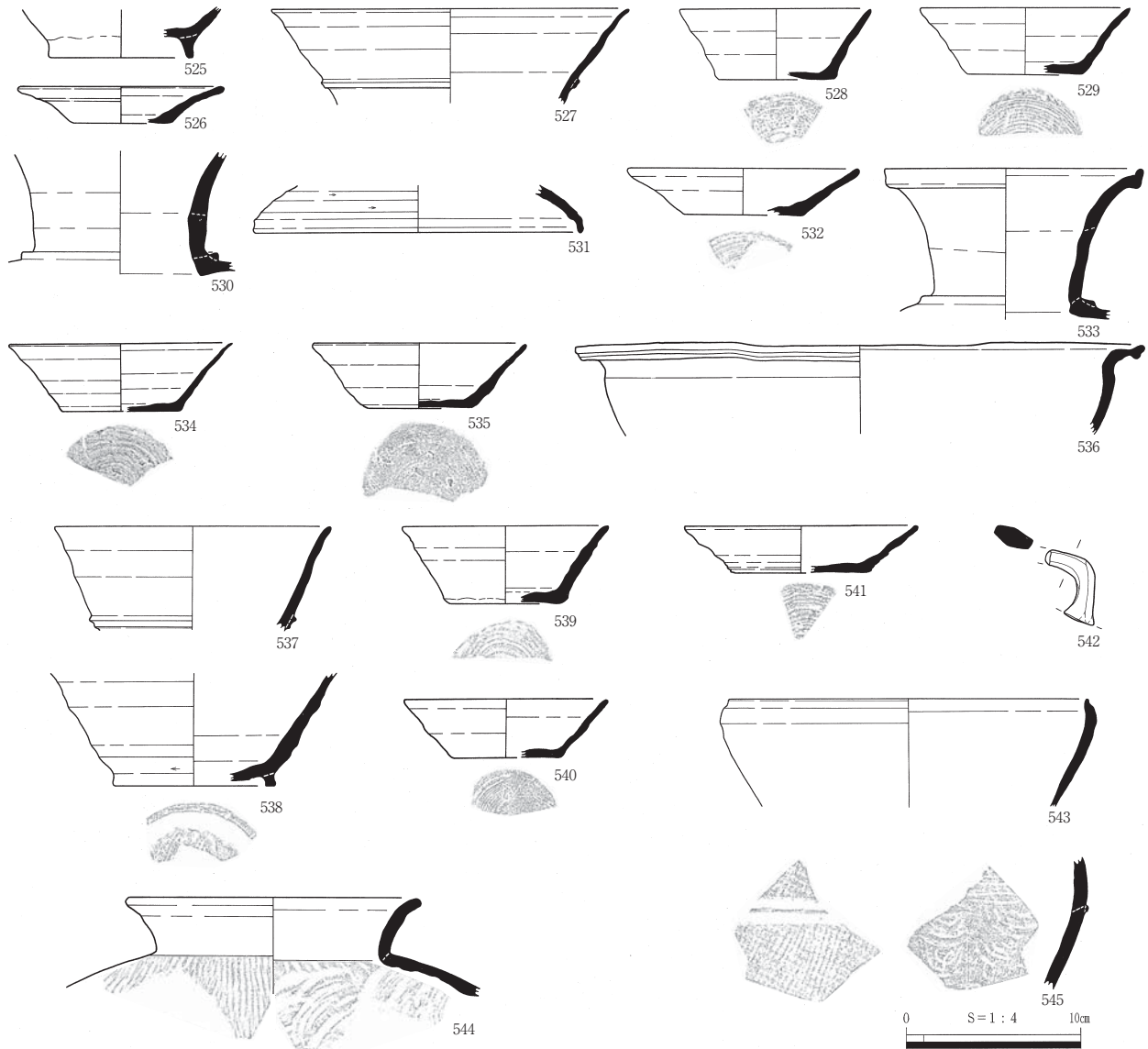
534～536は灰原1・3いずれに帰属するか不明のもので、表土掘削に伴って出土している。534・



第147図 灰原出土須恵器遺構間接合資料(1)



第148図 灰原出土須恵器遺構間接合資料(2)



525・526：灰原1周辺
532・533：灰原3周辺

527～530：灰原2周辺
534～536：灰原1または3

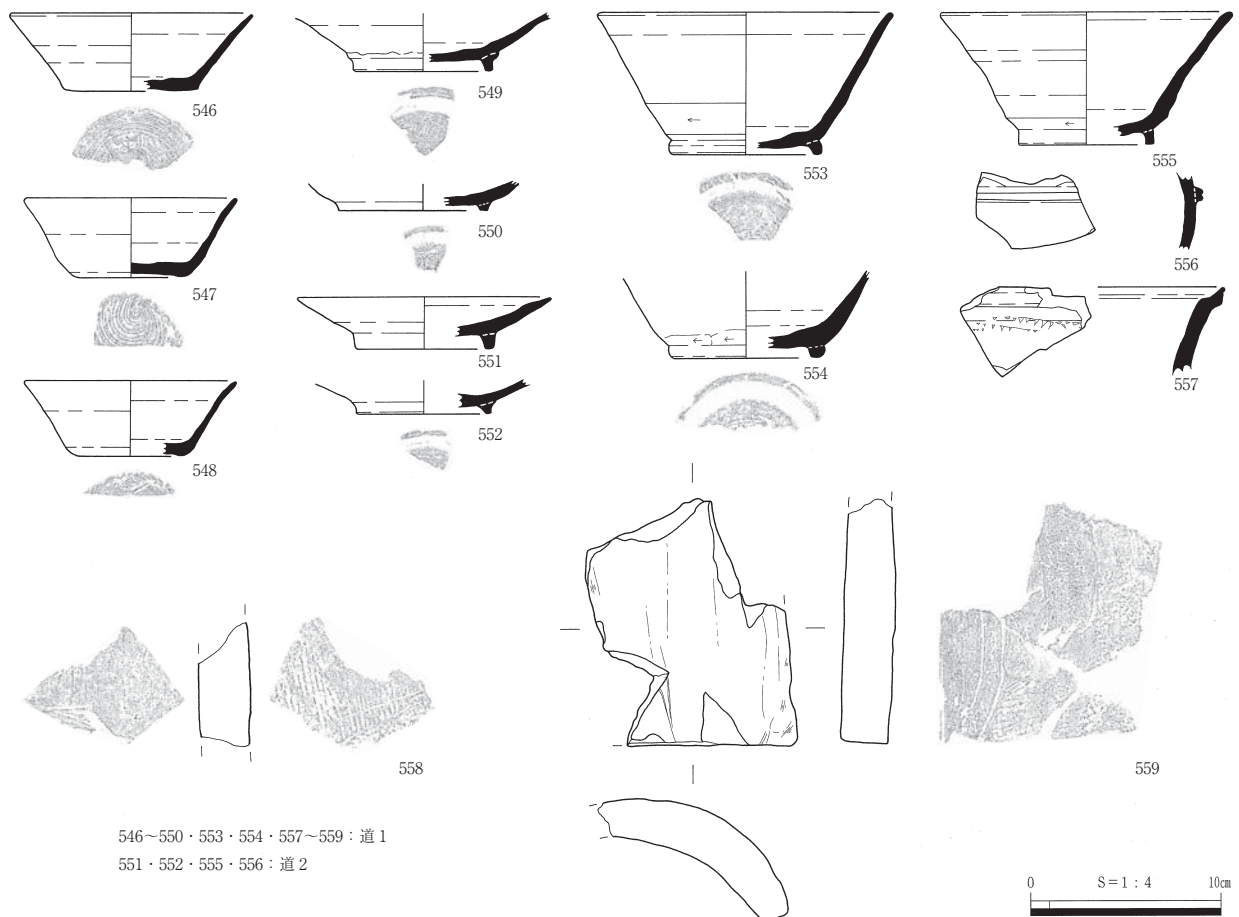
531：灰原1・2付近
537～545：灰原1～3排土

第149図 灰原関連須恵器

535は杯、536は鉢である。537～545は灰原1～3いずれに帰属するか不明のもので、排土または表土から出土している。537は突帯付高台杯、538は高台杯、539・540は杯である。541は皿で、542は小型の平瓶の把手である可能性が高い。543は鉄鉢形の鉢である。544は薄手かつ小型品で、タタキと当て具痕が見られるため横瓶に分類しているが、小型の甕とした方がよいかもしいない。545は突帯の付いた胴部片で、瓶類に分類したが、壺形の器形となる可能性が高い。

(5)道1・2出土遺物(第150図)

道1・2は窯1・2と灰原1・2に重複しており、埋土から大量の須恵器や瓦が出土している。道の堆積土や遺物の包含状態からみて、これらの遺物は明らかに須恵器窯関連遺構群に由来するものと考えられる。おそらく、道との重複範囲の大きい灰原1に由来する遺物が主体となっている可能性が



第150図 道1・2出土須恵器・瓦

高い。

遺跡全体で少量しか出土していない器種や特徴的な個体を選択して図化した。

546~548は杯、549~552は高台皿、553~555は高台杯である。556は体部に突帯が巡る壺の破片である。557は甕の口縁部破片で、外面に連続刺突したような痕跡がみられる。

558は平瓦で、凸面に平行タタキが明瞭に残されている。須恵質で、焼台や窯壁材に転用された可能性がある。559は丸瓦である。